

日高奨学会創始者

－ 田端春三翁略伝 －



1 生家田端家

天正年間、亀山城主湯川直春は甲州武田氏より初代田端六太夫を客分として日高に招いた。はじめ田端家は今の日高町小池に住んでいた。その後吉原に転住して松見寺の西の楠の木が生えている辺り1800坪を所有し、農業と養蚕業を営んでいた。

田端家5代目喜兵衛の時、享保年間、菜種油製造のため吉原から水利に恵まれた田井に転住。寛政2(1790)年7代目正容は入山組(今の日高町・美浜町の大半の20近くの村を包括する行政区画)の大庄屋(地域の年貢や治安などを統制する重責を担う役職)を勤めるようになった。田端家の大庄屋としての勤めは江戸藩政が終わるまで続けられ、庄屋屋敷にあった代々の記録文書は明治になってすべて和歌山県庁に保管された。

菜種油の製造は、付近の農家から菜種を買い入れ、斎川の水を屋敷内に引き入れ、水車を動力にして製油していた。「田井の油屋」の田端家が製造した菜種油は西川から船で大阪まで運送された。西川と斎川が交わる辺りが田端家の在所であった。田端家が所有する田地は、明治27年当時で約21町6反余あり、日高郡内では20町を越える地主は17家ほどであった。

2 田端春三翁伝

春三翁の祖父年陰も父春清も祖先の名を継いで喜三兵衛を名乗り、大庄屋を勤めた。このような先祖代々大庄屋を勤めた伝統ある富豪の家に春三翁は、明治10(1877)年7月24日に産声を上げた。父は春清、母はマチ。二男四女で期待の男子であった。末っ子の春三翁は父が48歳、母が37歳の時の子である。10歳上の兄は25歳で病没した。

春三翁は少年期の明治19(1886)～23(1890)年、長姉の嫁ぎ先の田辺の原家(三つ葵の酒造元)に寄宿し田辺高等小学校に通学。青年期に入り、明治25(1892)年15歳、上京して受験準備のため東京数学院・国民英学会・物理学校に通学して素養を積んで、明治26年16歳で東京専門学校(今の早稲田大学)専修英語科に進学した。

しかし、父親の健康が優れず学業半ばで東京専門英語専修科を卒業して明治27(1894)年17歳で帰郷した。9年後の明治36(1903)年26歳の春三翁は11歳年下の塩路さだと結ばれる。この結婚は二代にわたる塩路家との近親関係である。春三翁の母マチは兄塩路彦七の妹、妻のさだは彦七の娘。春三翁とさだはいとこ関係にある(田端家と塩路家との関係を示す系図は日高奨学会創立30周年記念誌『田端春三翁の面影』に掲載されてい

る)。二人の間には貢太郎・拓二・とし・あさ子の二男二女、4人の子供を授かった。妻さだ方の塩路家はまた大地主であるとともに兄の彦平氏は材木、繻、木炭、肥料、砂糖などを広く扱う商家であった。彦平氏の弟彦七も御坊切つての事業家だった。彦七氏の子息には白浜温泉を中心に次々と新企業を成功させた小竹岩楠氏、材木商として財を成した淳之介氏などが居られる。また、翁自身の交友関係にも経済・学問など優れた方々が多数居られた。

中でも田辺時代の少年期から交友があり、上京中もお互いの下宿を行き来し交流を深めた脇村市太郎氏は第一の親友であった。脇村氏は翁より3歳年長で当時は田辺の実家の切目屋薬局を継ぐため東京帝国大学薬学科選科で学んでいたが、学業半ばの20歳で両親の命で田辺に帰った。彼は帰郷後家業の切目屋薬局の経営に新風を吹き込み、植林事業や株式投資、地方産業の振興等に力を注ぐなど名実ともに田辺第一の実業家になられた。昭和32年には私財1千万円を提供し奨学事業の財団をつくり脇村奨学会を創設された。田端春三翁ものちに山林事業に乗り出し、日高における奨学事業を創められたのも、このような人的環境が大きな影響をもたらせたものと思われる。

翁16歳(満15歳、明治26年(1893))の時の日記に「新聞縦覧所へ行き諸種の新聞を見る・余の好んで見る所の政治・文学談」を十数の新聞で2～3時間も熱中して読んでいた。下宿では福沢諭吉の時事新報や徳富蘇峰編集の『国民之友』などを愛読し、明治から大正期の時代のパイオニア的な欧米デモクラシーのフレッシュな思想などに刺激を受けた。立憲改進黨を起こした大隈重信の創立した東京専門学校(後の早稲田大学)に進学した春三翁が大きく変わりゆく時代や社会の風潮の中で進取の気概をもって青年期の一時期を東京で過ごした。その後の春三翁の生きた時代は、我が国は世界列強と競争する道を進んで行くこととなった。明治27(1894、17歳)～28年の日清戦争と戦後の第一次産業革命、37(1904、27歳)～38年の日露戦争と第二次産業革命、大正3(1914、37歳)～7年の第一次世界大戦参戦、昭和12(1937、60歳)年日中戦争、昭和16(1941)年太平洋戦争、昭和20(1945、68歳)年日中・太平洋戦争終結など、翁の青年期から老年期は正に日本が戦争に明け暮れた時代であった。

長い戦争の時代が終わり、田端家の状況は既に地主制から距離を置き、明治40年田井に日高製材所を設立、大正4年に日高紡績工場を同族で設立した。また田端家では製炭業のため近隣の山林を所有していたが、明治40年頃山林熱が高まり、材木商を営んでいた義父塩路彦七氏の勧めもあって、春三翁30歳の頃小又川に植林、さらに明治42(1909)年十津川村八重佐(やあさ)で翁の生涯をかけた山林大事業(春三翁は二宮尊徳翁の言葉から「樹の撫育」と呼んだ)が開始された。しかし戦時状態が続く中、木材価格の乱高下や経済界の極度の混乱、しかも昭和19年の長男 貢太郎氏の殉国という悲哀など数々の苦難を越えて山林の「撫育」は続けられた。翁は「生涯の読書人」としても知られる。「文は人なり」と言われるように、学業半ばで帰郷した翁は読書を通して人格形成を図った。幕末の儒学者佐藤一斎の『言志四録』、福沢諭吉、徳富蘇峰、内村鑑三、漢籍などが蔵書目録に多数見られる。青年の教育にも関心を寄せられた。明治末に和田常德寺住職 湯川浄暢氏が始めた私立中学校「常磐義塾」の理事長に就任して運営支援したり、松原小学校の少年野球の後援、プール建設やピアノ寄贈に当たったりしている。因みに、常磐義塾は昭和23年3月をもって閉校となり、その蔵書は春三翁の支援を受け昭和25年に「常磐

文庫」として日高高校図書館に寄贈された。また、日高高校野球部初代後援会長も務められた。

漢籍『管子』に「一年の計は穀を樹うるに如くはなし。十年の計は木を樹うるに如くはなし。終身の計は人を樹うるに如くはなし」～一年だけのことを考えるなら米麦を植えるに限る。穀物は一年に一回稔ってくれる。十年間を考えるなら果樹を植えると良い。しかし、五十年百年後の安心を得ようとするならば果樹などでなく、後を任すに足る人材を育てることだ～五十年百年を要する極めて息の長い杉・桧の「撫育」に取り組み、この日高地域に於いて経済的な理由から上級学校に進むことの出来ない優秀な青年を育成すること、人材を育てる教育を支援することに熱意を注がれた。

昭和35(1960)年7月、春三翁は82歳になられた。4月には田辺で「脇村奨学会」を設立(昭和32年)した畏友の脇村市太郎氏が85歳で逝去された。このような状況の中で春三翁は県教育委員長の西川平吉(初代日高高校学校長)に対して奨学会設立の申し入れを行った。申し入れ内容は～「資金は手塩に掛けて育てた小又川の50年生の美林を売却してつくる」「奨学会の名前に『田端』は付けるな」「あとは一任する」～こうして、昭和35年9月16日に「日高奨学会」が財団法人として文部省から設立許可され、昭和36年第1回奨学生が選考されたのである。

木の国紀州に、脇村奨学会と日高奨学会が脇村市太郎、田端春三という「無二の盟友」とも言うべきお二人の山林家が相呼応して私財を投じて設立されたことは讃えるべき美事である。両翁ともに終生の読書家であり、事業家であり、自らに厳しく他人には温かい眼を注がれた。そうして共に木を育てる慈愛心をもって育英事業を興された。春三翁は奨学会設立から2年目の昭和37年1月20日、ご家族に見守られて樹木鬱蒼の斎川沿いの自宅で静思沈着な翁らしく安らかに永遠の眠りに就かれた。享年84歳であった。戒名は「静観院円蒼潜心居士」、潜心(心を内に潜め外に表さない)は翁が好んだ言葉であった。田端春三翁は至誠一貫、高潔にして無私で雄偉な生涯を全うされたのは田端家代々の家風と翁ご自身の修徳のご努力に因るのは勿論であるが、翁のご活躍を内面から支えて来られたさだ夫人の内助の功が並々でなかったことである。夫人は、翁の終焉に先立つ1年前の昭和36年2月6日惜しまれつつご逝去された。

- *参考文献 『田端春三翁の面影』(日高奨学会30周年記念誌)1990年8月1日発行
『日高奨学会50周年記念誌』2010年11月6日発行
『日高高校百年史』2015年2月23日発行
(文責 日高奨学会代表理事 山下真玄)